

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第140号

イザヤ 65:1

平成19年5月25日

そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。「ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々．．．私のことばに耳を貸してください。今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているのではありません。これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し．．．また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し．．．主の大なる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』イスラエルの人たち、このことばを聞いてください。神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと、不思議なわざと、あかしの奇蹟を行なわれました。それらのことによって、神はあなたがたに、この方のあかしをされたのです．．．あなたがたは、神の定めた計画と神の予知とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました．．．私たちはみな、そのことの証人です。ですから、神の右に上げられたイエスが、御父から約束された聖霊を受けて、今あなたがたが見聞きしているこの聖霊をお注ぎになったのです．．．ですから、イスラエルのすべての人々は、このことばをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです．．．「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば賜物として聖霊を受けるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです．．．その日、三千人ほどが弟子に加えられた。使徒の働き 2 : 14 - 41.

ユダヤ教の三大祭りの二つ目は初夏の祭り「七週の祭り（シャブオット）」です。小麦の初穂を刈り入れる「刈り入れの祭り」とも、ギリシャ語の五十日の意から「ペンテコステの祭り」とも呼ばれており、成年男子はエルサレム神殿に巡礼することが定められていました。ユダヤ暦の《シバンの月（宗教暦の第三の月で、五月か六月）の六日》に祝われましたが、この日付けは大麦の初穂の束を主に向かって揺り動かした日から数えて七週（49日間）を過ぎた五十日目とされ、定まった日付が与えられたわけではありませんでした。大麦の初穂の束がささげられなければ、この日は確定しなかったのです。大麦の初穂をささげる日は、安息日の翌日と定められていたため、「種を入れないパンの祭り（ペサハ）」の初日の「大なる安息日」の翌日、すなわち、祭りの二日目、《ニサンの月の十六日》と決められ、この日から数えて五十日目が七週の祭り日とされたのです。しかし、「安息日」の解釈で、パリサイ派とサドカイ派の間で議論があり、サドカイ派はこの「安息日」を祭りの初日の「大なる安息日」ではなく、『週毎の安息日』と解釈したのですが、結局はパリサイ派の解釈に落ち着き、今日に至っています。サドカイ派の解釈に従えば、大麦の初穂をささげる日、すなわち、『初穂の祭り』の日は且曜日になるのです。

興味深いことに、イエス・キリストは掟に定められている両方の「安息日」を人類救済の画期的な出来事の中で成就してくださったのです。ユダヤ教の宗教暦の最初の祭り「過越の祭り」の日《ニサンの月の十四日》に『過越のいけにえの小羊』として十字架上で亡くなられたイエス・キリストは三日後《ニサンの月の十七日》に甦りましたが、キリストが亡くなられた週はたまたま《ニサンの月の十六日》が『週毎の安息日』だったので、大麦の初穂をささげる日として、《ニサンの月の十七日》且曜日に甦られたのです。イスラエルの主の例祭で『大麦の初穂』が無事にささげられて初めて、次のささげ物である『七週後の小麦の初穂』をささげることができたように、イエスが人類の初穂として甦ってくださったこと（前者に象徴）によって初めて、イエスを信じる者はだれでも、イエスに続いて第一の復活に与り、甦りの体が与えられること（後者に象徴）が確証となったのです。

冒頭に引用した出来事はイエスが甦られてから五十日目の日曜日、ユダヤ教の例祭「七週の祭り」の日起こった聖霊降臨の出来事でした。一週間続く祭りのため外地に住んでいるユダヤ人はじめ、改宗者たちや多くの巡礼者たちがエルサレムに集まってきているときに、弟子たちにイエスが約束された聖霊が下り、一斉に色々な外国語で福音を語りだすという前代未聞の出来事が起こったのです。大勢の人たちが何事かと集まってきたところで、ペテロが、キリストの弟子たちに何が起きているかを、ユダヤ人の精通していたヘブル語（旧約）聖書にすでに書かれていることの成就であるとして、巧みに聖句を引用して説明し始めたのです。

ユダヤ人たちの間では一般にぶどう酒は肉を食べるときにだけ飲んだので、肉料理を食べる夕方だけに限られていました。そこでまずペテロは、イエスの弟子たちが慣習を破っているのではないことを明らかにした上で、ヨエル書 2 : 28-32 をユダヤ人たちに思い起こさせます。ユダヤ人たちの時の概念は、

《この時代》か《来るべき時代》の何れかにはっきり分かれていましたが、ヨエルの預言はこの二つの時代の間の変遷期に関するものでした。彼らにとって来るべき時代とは《神の国の時代》でしたが、ペテロは、イエスが語っておられたように、その時代がすでに来たことを告げたのです。神から聖霊の賜物が注がれたということは、イエスの甦りと同じく、救いの時代到来のしるしでした。しかしユダヤ人にとって、救いの時代はいつも未来のことでしたから、自分たちが生きているこの時代にすでに神の時代が到来したことを理解するのは難しいことでした。そこでペテロは、ヨエルの預言を「霊」の注ぎから「主の大いなる輝かしい日」に及ぶまでを引用することによって、約束の聖霊の顕れがイエスによってもたらされた新しい時代のしるしであるなら、イエスが初臨（御降誕）で始められたことを完成する再臨はその保証であり、現在がその変遷期の直中であることを語ったのでした。ペテロは後日のメッセージの中でそのことをさらに詳しく、「あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られたあの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。．．．神は、まずそのしもべを立てて、あなたがたにお遣わしになりました。それは、この方があなたがたを祝福して、ひとりひとりをその邪悪な生活から立ち返らせてくださるためなのです」（使徒の働き3：19-26、下線はイエスの再臨によって始まる、来るべき「神の国」の時代への言及）と語っています。

次に、ペテロはユダヤ人たちの関心を《来るべき時代》から「ナザレ人イエス」に移し、イエスがすでに行なわれた誰にも否定できない数々の力あるわざや奇蹟を思い出させた上で、イエスの十字架上での死と三日後の墓からの甦りが、邪悪な人間のたくらみから引き起こされたことではなく、「神の定めた計画と予知とによ（った）」のであったこと、すなわち、すでにヘブル語聖書に記されていた預言の成就であったことを明らかにしたのです。さらに、イエスの行なわれた奇蹟を否定することは不可能でも、その源を神ではなく悪霊であると言いがかりをつけることのできた人々に対しペテロは、ユダヤ人たちの崇敬しているダビデ王の預言を詩篇16：8-11から引用することによって、罪ある人間を罪の結果の死から救い出すという神の人類救済の目的を達成してくださった「この方」、すなわち、ナザレ人イエスが「死につながれていることなど、ありえな（かった）」と説き明かしたのでした。

特に詩篇16：9、「それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでる。私の身もまた安らかに住まおう」は、神に信頼を置く者を神が墓に捨て置かれることはないことを語っていると解釈され、ユダヤ教のラビたちも復活に言及する聖句として捉えていたので、ペテロはユダヤ人たちに向かい二つの点を指摘します。一つは、ダビデ自身に関しては、「死んで葬られ、その墓は今日まで私たちのところにある（る）」（使徒の働き2：29）ので、すなわち、ダビデは今日までまだ甦っていないのでこの詩篇を自分のこととして書いたのではないということ。もう一つは、もしダビデがだれか他の人のこととしてこの詩篇を書いたのであれば、ダビデは預言者として書いたに違いないこと、そしてそれはダビデの血筋から生まれることが約束されていたメシヤ（詩篇132：11で、主はダビデに誓われた）についてに違いないこと、の二点でした。ペテロは、「それで後のことを予見して、（ダビデは）キリストの復活について『彼はハデスに捨てて置かれず、その肉体は朽ち果てない。』と語ったのです。神はこのイエスをよみがえらしました。私たちはみな、そのことの証人です」（使徒の働き2：31-32、下線付加）と、ギリシャ語動詞のアオリスト時制（過去形）を用いて、詩篇16：10がメシヤなるイエスにおいてすでに起こったこと、このことをエルサレムにいた者すべてが目撃したことを確信を持って語ったのでした。10節をメシヤ預言としては捉えていなかった多くの敬虔なユダヤ教徒を前に、ペテロの大胆で確信に満ちた宣言は、さらに続きます。復活の出来事から、「神の右に上げられたイエス」（「神の右手によって」と訳すことも可）、すなわち、イエスの昇天の出来事に及び、ペテロは、神の権威と力の御許に引き上げられたイエスが、父なる神から聖霊を受け、人々が今日撃しているこの聖霊を注いでくださった、すなわち、聖霊を注がれたのは昇天されたイエスであると、説明したのでした。ヨエルの預言によれば、聖霊を注がれるのは神ですから、ペテロの宣言に「イエスは主である」ことが示唆され始めたのです。ユダヤ人にとってはびっくりするようなこの宣言は、詩篇110：1の引用で決定的にされます。この詩篇はかつてイエスご自身が引用して、指摘されたように、ダビデが、神がメシヤに対して「わたしの右の座に着いていなさい」と言われたことを記した、メシヤに言及する聖句として広くユダヤ人の間でも捉えられるようになっていたものなので、今神の御許におられるのは、ダビデが「主」と呼んだメシヤなるイエス・キリストということになるのです。聖霊に満ちたペテロのメシヤ預言の説き明かしは、聖書に精通していたユダヤ人を覚醒させたのでした。

ペテロの話に耳を傾けていた人々は、ユダヤ人のメシヤとして神が送られた主イエス・キリストを十字架につけ殺したのが、無知と閉ざされた心のゆえにイエスのなされたメシヤのわざを見ながら、教えを悟ることのできなかつた自分たちであったことに気づき、主を十字架につけたという恐ろしい言葉に、心を刺され、「私たちはどうしたらよいでしょうか」と弟子たちにすがります。そこで、悔い改め、イエス・キリストの名によるバプテスマを受け、罪を赦してもらい、賜物として聖霊を受けるようにとの指示を受け、エルサレムではおよそ三千人の者が福音を受け入れ、洗礼を受け、イエスの弟子に加えられたのでした。この日に、ヨエルの預言、「主の名を呼ぶ者は、みな救われる」の通り、イエスを信じる者の群れ、教会が誕生し、救いが全人類に及んだのですが、奇しくも、ユダヤ教では「七週の祭り（シャブオット）」に、ルツ記を朗読するのです。モアブ人ルツが丁度この小麦の刈り取りの時期にイスラエル人ボアズと出会ったことに由来するのですが、ルツはイスラエルの神を信じ、神の民に加えられた異邦人でした。しかも、ダビデ王の曾祖母となり、メシヤの系図の中に入れられたのです。伝説ではダビデはシャブオットに生まれ、死んだとされています。このように、神の救いは初めから計画されていたように、このペンテコステの日に、イスラエル人だけでなく全人類に向けられ、キリストの群れによる世界宣教が始まったのです。